

須田記念

2019年7月 祝賀復刊記念号

視覚の現場

特集

- ① 須田国太郎
- ② 今言いたいこと



祝賀記念復刊にあたって

主として目に見えるものを通して気持ち^{こころ}を伝える技を視覚技術と言え、その現象に言葉で近づこうとする試みは何と申したらよいのでしょうか。古くから美術批評・芸術批評、美術史・芸術史、美学・芸術学などと呼ばれてきた分野は、その中核をなすものでありましようが、日常的な言葉においてもそれはさまざまに行われているようです。

始めにこんなことを記してみましたのは他でもありません。嘗て1999年に『美術フォーラム21』(年2回)を發刊させていただき、しばらくたった時、それだけでは足りない、言葉足らずでも良い、もっと言いたいことを簡単に記したのも必要ではないかと思ひ、2009年5月より『視覚の現場・四季の綻び』(季刊)と申しますものを出させていただくことになりました。しかしながらそれは2011年9月の10号までで終了とせざるをえなくなり、いつか機会があれば復刊してみたいという意志だけが残ることになりました。

それが本年初めになって、須田国太郎画伯(1891~1961)のご子息須田寛様のご出資とご高配によって復刊が可能となり、須田国太郎美術振興会(仮称)の結成を祝賀するという形で、まずは復刊記念号として出版されることになりました。無上の慶びとするところでございます。

内容も「特集①須田国太郎、特集②今特に言いたいこと」となり、この経過に相応しい内容にさせていただけたのではないかと思います。

晩秋には『須田記念視覚の現場』第一号として、新たな出発を予定させていただきます。

皆様の忌憚なきご批評をいただき、憚りながら一層充実した出版物にさせていただきます。

末筆ながらご協力を惜しまなかった皆様にこの場を借りて、厚く御礼申し上げます。

2019年7月20日

須田国太郎美術振興会(仮称)／醍醐書房代表

原田平作

目次

祝賀復刊記念に当たって／原田平作…………… 2
 須田国太郎作品グラヴィア——作品解説／原田平作…………… 4

特集1 須田国太郎

家族からみた「須田国太郎」／須田寛…………… 14
 須田国太郎のセザンヌ受容——彩色技法理解の的確さ——／岩城見一…………… 17
 「能の姿」を描く（上）——室町舞台のこと／岸 文和…………… 20
 須田国太郎再考／島田康寛…………… 23
 《ヴァイオリン》の黒いかたまり／中谷伸生…………… 26
 須田国太郎と木下杢太郎のスペイン／橋 秀文…………… 29
 須田国太郎の近代性——日本の水墨画的精神と調和的志向——／原田平作…………… 32
 須田国太郎作品に“幽玄の美”をみる／森川恵昭…………… 35

特集2 今言いたいこと

岩倉壽の遺作と再評価「岩倉寿展——のこされた作品たち——」を通して／上園四郎… 38
 2020東京オリンピックを前に思うこと——美術館・博物館の現在／大坪健二…………… 41
 儂い詩情——ポーランド的感性の行方——／加須屋明子…………… 44
 子どもたちに豊かな生活と表現、そして生きるよろこびを／神吉 脩…………… 47
 自国美術史は誰がつくるのか／佐藤道信…………… 50
 美術館での写真撮影とめぐって／鈴木禎宏…………… 53
 パリ万国博覧会（1937）日本館の国名と色彩／高階絵里加…………… 56
 美術作品の運命——廃棄された作品の幻を追って——湯田寛の場合／中塚宏行…………… 59
 助成金と展覧会開催——京都・大学ミュージアム連携の活動を通して／並木誠士…………… 62
 ふたたび「何のために新美術館を建設するのか」／橋爪節也…………… 65
 フェノロサの幻影／宮島新一…………… 67
 京都における美術館の立場／山田諭…………… 70
 回想：スペインでの「具体—行為と絵画」／山脇一夫…………… 73

英文要旨

各記述／各執筆者／翻訳 = 川上幸子…………… 77

須田国太郎 (1891~1961)



表紙解説・表

《真名鶴 (Cranes)》

1953年 (昭和28年)

59.5×72.7 cm

油彩・キャンヴァス

第21回独立美術協会展出品 (1953)

真(名)鶴は首筋が白く目の周囲が赤い鶴で、冬季にシベリヤあたりから鹿児島県の出水市^{いずみ}近辺に多く飛来することで知られる。須田はその光景を見て本作を制作したというよりも、このころ動物園に足しげく通っており、その写生を通じて本作を制作したとみられる。日記によると、昭和28年9月29日「朝マナズルかく」とある。一気に仕上げたことがわかる。左に四羽、右に一羽。左側右端の一羽は首をすぼめていて、右と同様の姿勢をとっている。首筋を伸ばしているのは子供で、家族ともとれる。バックは赤黒い世界で、鶴と調子を合わせ、その先に青い空が広がる。その青さは透き通る感じである。昭和38年に京都市美術館と(東京)国立近代美術館で開かれた遺作展の目録表紙に選ばれた作品。



表紙解説・裏

《能デッサン・柏崎 (Noh play, Kashiwazaki, Dessin)・金剛巖》

1946年9月8日

26×37 cm、鉛筆・紙、デッサン

於金剛能楽堂

大阪大学蔵

須田には約六千点を超える能・狂言に関するデッサンがあるが、その大部分は大阪大学に保管されており、一部は京都国立近代美術館に所蔵されている。天野文雄氏の調査によると最も古いのは昭和2年3月20日に京都の金剛能楽堂で演じられた「熊野」のデッサンで、ここでは戦後間もない昭和21年に演じられた「柏崎」から取材した。筋は夫に死なれ子の出家をも聞いて狂ったようになった柏崎の妻が、信濃善光寺に詣で舞を舞うことで救われるという話であるが、舞を舞う前の姿と舞って涙ぐむ姿の二様がここに同時に捉えられている。河北倫明氏が指摘する須田の特色の一つとしての、「静中動」「動中静」というようなことを鑑みると、須田が捉えたいと目指したものは、右の「悲しみの涙」と添書きされた方ではないかと思われるが、これを油彩で表現することは、至難のことであったと思われる。いざれにせよ須田には、デッサンの多さに比較して能狂言の油彩表現が少ないのは事実である。左の読みは「露白さき紫/長絹こん地金花襖わらび/腰巻、あい秋草縫/鬘帯こん地金箔」と読める。